

名古屋大学

講座の概要

〈各科目の概要〉

(テレビ科目) 土—人間とのかかわり

放 送 日 時 昭和63年10月1日～昭和63年12月24日

毎週土曜日 午前7時00分～午前7時45分(名古屋テレビ放送)

科目のねらい	内 容 ・ 方 法
<p>名古屋大学では、大学における研究・教育を広く地域社会に公開し、大学と地域社会との交流を通して、地域社会の発展と大学における学術研究の進歩とに資することを目的として、昭和60年度から「科学と人間」を基本テーマとして放送公開講座を実施してきた。</p> <p>本年度は、強い社会的要請のもとに、学際的研究が急速に進展しつつある土—土地に関連して、「土—人間とのかかわり」を大テーマとして選定した。</p>	<p>「母なる大地」といわれるように、世界には気候・風土に対応してさまざまな「土」が存在し、人はみなそれぞれの土地に合った生活を営み、文化を発展させてきた。</p> <p>土は鉱物、有機物、空気、水、生物から構成され、これらが巧妙に集合した自然体である。土質、気候、地形が異なるところには異なった種類の土壌が長い時間をかけて生成する。動物・植物は土と深いかかわりをもって進化し、今日の生物相とその分布を見るに至った。また土の中には多様な生物が生息し、土は生きた土壌として多くの機能を担っている。</p> <p>人の存在にとって、土の果たしている最も大きい役割は、食料・飼料をはじめ衣類や建物などの材料を得るための農・林・畜産業の場としての役割であろう。今まで人類は農地を拓き、森林を育て、土から恵みを得てきた。そして今もなお人口の急増する21世紀へむけて技術開発の努力をつづけている。</p> <p>人類は数千年も前から土や土木工事の場や材料として利用してきた。また土を陶磁器の材料や各種の鉱物資源として利用してきた。近年ではファインセラミックス等と新素材の開発を生み、微生物遺伝子源の宝庫としても応用範囲はますます広がっている。</p> <p>都市部における土木・建築ラッシュは日本国土を改変しつつある。しかしその反面、人々は緑に飢え、地盤沈下や土砂の崩壊に悩んでいる。世界的規模の土壌の砂漠化、塩類化、汚染等は我々に何を語り、何を訴えているのであろうか。土をめぐる今日の環境はあまりにも深刻であり土の将来は予断を許さない。我々はメソポタミヤ、ナイル</p>

流域その他多くの地域で土の衰退とともに文明が滅亡あるいは凋落してきたことを知っている。土は人間社会の将来を映す鏡ではなからうか。

一方、素材としての土とは別の観点から大地を考えることもできる。それは、スペースとしての側面、すなわち「土地」の問題である。

歴史的にみると、土地所有のあり方は、その時代の社会に応じて変化している。土地の利用は、農業的土地利用および都市的土地利用の進展によっていっそう広域化し、さらに現代社会においては、巨大都市の地価や私有権をめぐる問題を生み出している。

このように、大地は、人間生活と多様なかわりをもっている。本講座では、最近の研究成果を取り入れて、素材としての「土」とスペースとしての「土地」の両面からその歴史と現状を浮き彫りにするとともに、人間社会の将来についても考えていく。

(ラジオ科目) 東海の企業と経済

放送日時 昭和63年10月1日～昭和63年12月24日

毎週土曜日 午前6時00分～午前6時45分(東海ラジオ放送)

科目のねらい及び内容・方法

日本は世界の経済大国に成長し、日本国民の一人あたり所得は、世界のなかでも最も高いグループに属するまでになった。しかしながら他方で、現在の豊かさを更に充実させ、それを維持し、発展させることができるかどうか問われている。企業の活動には国境がなくなりつつあり、企業は国境を越えて自由に移動するようになってきているが、その背後で労働者の雇用不安やわが国の伝統的雇用慣行の変化が起こるなど、生活面の不安が増してきている。東京への情報の集中と国際化は、東京の地価を極端に上昇させ、それが名古屋などの地方大都市にまで波及して経済活動や生活に無視できない影響をおよぼしつつある。こうした新たに起こってくる様々な問題に対し、政府は経済活動を活性化して、国民の生活を充実させ安定化させる政策を模索し、地方自治体は経済社会の流れに即応して、時代にとり残されないように地方の発展の道を探っている。

東海地域は生産面におけるわが国の中枢地域である。東海の企業は、経済の環境変化や輸出環境の悪化にどのように対応し、将来、どのような経営を目指しているのか。行政のこれから果たすべき役割はなにか。東海の経済と暮らしはどのような変わろうとしているのか。この講座ではこうした問題を経済と企業経営および歴史の側面から考える。

〈各科目の構成〉

(テレビ科目) 土—人間とのかかわり

主任講師：教養部 伊藤 忠士

放送回	放送月日	中 心 テ ー マ	担 当 講 師 等
第1回	10月1日(土)	土—一人のなかの土—	名誉教授(中部大学教授) 井 関 弘太郎 文学部助教授 梅 津 正 倫
第2回	10月8日(土)	土の歴史	理学部教授 糸魚川 淳 二朗 静岡大学名誉教授 加 藤 芳 朗
第3回	10月15日(土)	土のなりたち	農学部教授 鋤 塚 昭 三 名誉教授 壽 藤 良次郎
第4回	10月22日(土)	土と生物	農学部教授 鋤 塚 昭 三 名誉教授 佳 山 良 三 農学部教授 杉 山 達 夫 " 助教授 木 村 真 人
第5回	10月29日(土)	土のはたらき	農学部教授 鋤 塚 昭 三 " 教授 吉 田 重 方 " 教授 片 岡 順 人 " 助教授 木 村 真 人
第6回	11月5日(土)	土と農業	農学部教授 吉 田 重 方 " 助教授 木 村 真 人
第7回	11月12日(土)	土の保全	農学部教授 片 岡 順 人 工学部教授 植 下 協 一 " 教授 岩 田 好 朗
第8回	11月19日(土)	土と土木・建築	工学部教授 植 下 協 一 理学部教授 青 木 治 三 工学部教授 多 賀 直 恒 " 助教授 松 沢 宏 助
第9回	11月26日(土)	素材としての土の利用	工学部教授 平 野 真 一 " 教授 沖 猛 雄 教養部教授 塩 崎 平 之助
第10回	12月3日(土)	土地の所有	文学部教授 早 川 庄 八 " 助教授 稲 葉 伸 道 教養部助教授 小 田 雄 三
第11回	12月10日(土)	農村および都市の広域化	文学部教授 石 水 照 雄 教養部教授 伊 藤 忠 士
第12回	12月17日(土)	現代大都市の土地問題	経済学部教授 真 継 隆 法学部教授 戒 能 通 厚
第13回	12月24日(土)	土・土地と人間社会の将来	教養部教授 伊 藤 忠 士 文学部教授 石 水 照 雄 経済学部教授 真 継 隆 理学部教授 糸魚川 淳 二 工学部教授 植 下 協 三 農学部教授 鋤 塚 昭 三

(ラジオ科目) 東海の企業と経済

主任講師：経済学部 教授 奥野 信宏

放送回	放送月日	中 心 テ ー マ	担 当 講 師 等
第1回	10月1日(土)	東海地域の産業構造	経済学部講師 根本 二郎
第2回	10月8日(土)	転換期に立つ「経済の国際化」	経済学部助教授 奥 村 隆 平
第3回	10月15日(土)	貿易自由化と東海の農業	経済学部助教授 荒 山 裕 行
第4回	10月22日(土)	銀行・証券からみた東海の金融構造	経済学部教授 千 田 純 一
第5回	10月29日(土)	現代の雇用問題	経済学部助教授 大 橋 勇 雄
第6回	11月5日(土)	政府の役割と戦後日本の財政	経済学部助教授 竹 内 信 仁
第7回	11月12日(土)	先端技術と中小企業	経済学部教授 瀧 澤 菊太郎
第8回	11月19日(土)	産業基盤	経済学部教授 藤 井 隆
第9回	11月26日(土)	中部の産業と企業経営	経済学部教授 牧 戸 孝 郎
第10回	12月3日(土)	地域開発	経済学部教授 長 峯 晴 夫
第11回	12月10日(土)	東海の企業と無借金経営 — 企業者精神と環境適応 —	経済学部助教授 岸 田 民 樹
第12回	12月17日(土)	東海経済のこれまで・これから	経済学部助教授 伊 藤 正 直
第13回	12月24日(土)	東海経済 —トレンドを考える—	経済学部教授 木 下 宗 七

〈スクーリング〉

(テレビ科目) 土—人間とのかかわり

回 数	実 施 場 所	実 施 日 時	備 考
第1回	名古屋大学経済学部 第2講義室	昭和63年9月24日(土) 15:30~17:30	第1回は開講式、第4回は閉講式を兼ねる。
第2回		昭和63年11月12日(土) 14:00~16:00	
第3回		昭和63年12月3日(土) 13:00~15:00	
第4回		昭和64年1月7日(土) 13:00~15:30	

(ラジオ科目) 東海の企業と経済

回数	実施場所	実施日時	備考
第1回	名古屋大学経済学部 第2講義室	昭和63年9月24日(土) 13:00~15:00	第1回は開講式、第3回は閉講式を兼ねる。
第2回		昭和63年11月19日(土) 14:45~16:45	
第3回		昭和63年12月24日(土) 14:00~16:30	

上記、学習指導(ラジオ)の機会に下記のとおり特別講義を行う。

講義日 (月 日)	テーマ	内 容	講 師
第 1 回 (9月24日)	東海の経済・日本の経済	東海の経済は、日本の経済のなかで、どのような特色を持っているのだろうか。日本の経済・産業が移りゆくなかで、それはどのように対応し、変化しようとしているのだろうか。そのために行政の果たすべき役割はなんだろうか、これらの事柄を検討して、岐路にたつ東海経済の諸問題を考える。	経済学部助教授 奥 野 信 宏
第 2 回 (11月19日)	これからの日本経済	これからの日本経済がたどるであろうシナリオをいくつか考えてみる。当然のことながら、アメリカ経済など国際経済との関係が、大きなトピックとなる。もうひとつの大きなトピックは、「豊かさ」のあとに、いったい人びとがどのようなライフスタイルを探りあてそれがどのように経済の行方を規定するか、という点である。	経済学部長 飯 田 経 夫
第 3 回 (12月24日)	東海経済と企業	東海地方は政府の四全総(第四次全国総合開発計画)の示すように工業首都圏の実質と風格を備えるよう期待されている。本地域は周知のように高い競争力を持つトヨタ企業集団、堅実性をもって知られる無借金企業の多いことによって知られている。このような地域も急速に進む円高、第三次技術革新の進行によって産業構造調整を迫られているかにみ	経済学部教授 小 川 英 次

		える。このような観点から東海地方 経済と企業の現状と将来について考 えてみたい。	
--	--	--	--

〈再視聴〉

(テレビ科目) 土ー人間とのかかわり

実施場所	実施期間・日時
名古屋大学	昭和63年11月12日(土)9:00~13:30 (第1回~第6回放送分)
本部第5会議室	昭和63年12月3日(土)9:00~11:15 (第7回~第9回放送分)
(2号館地階)	昭和64年1月7日(土)9:00~12:00 (第10回~第13回放送分)

(ラジオ科目) 東海の企業と経済

実施場所	実施期間・日時
名古屋大学	昭和63年11月19日(土)9:00~14:15 (第1回~第7回放送分)
本部第5会議室	昭和63年12月24日(土)9:00~13:30 (第8回~第13回放送分)
(2号館地階)	

実施報告

(1) 実施責任者報告

名古屋大学教養部教授 伊藤 忠士

1. 放送公開講座の大学における位置づけと放送局その他の関係機関との協力関係について

名古屋大学の「放送利用の大学公開講座」は、従来、(昭和44年)から公開講座を実施してきた公開講座委員会において検討を進め、「大学の社会的使命にもとづいた良識によって、本学が主体的に学内で行われている独自の研究教育の成果を地域社会に公開すること。」を目的として昭和60年度からテレビ放送公開講座を昭和61年度からはラジオによる放送公開講座をも実施してきている。

本学では、放送公開講座を実施するため、公開講座委員会の下にテレビ講座については専門委員会を、ラジオについては実施部局である経済学部の小委員会を設置して検討をした。

放送局との打合せについては、実施責任者と主に専門委員会(小委員会を含む)があたり、同委員会に数回出席を求め、テキストの作成方法、PR 内容、収録の手順等詳細な打合せを行った。また、各回の主任講師等との会合をも数回にわたって開催した。

2. テーマの選定とそのねらいについて

1) テレビ放送公開講座について

テーマ：土—人間とのかかわり

「母なる大地」といわれるように、世界には気候・風土に対応してさまざまな「土」が存在し、人はみなそれぞれの土地に合った生活を営み、文化を発展させてきた。

土は鉱物、有機物、空気、水、生物から構成され、これらが巧妙に集合した自然体である。土質、気候、地形が異なるところには異なった種類の土壌が長い時間をかけて生成する。動物・植物は土と深いかかわりをもって進化し、今日の生物相とその分布を見るに至った。また土の中には多様な生物が生息し、土は生きた土壌として多くの機能を担っている。

人の生存にとって、土の果している最も大きい役割は、食料・飼料をはじめ衣類や建物などの材料を得るための農・林・畜産業の場としての役割であろう。今まで人類は農地を拓き、森林を育て、土から恵みを得てきた。そして今もなお人口の急増する21世紀へ向けて技術開発の努力をつづけている。

人類は数千年も前から土を建築や土を建築や土木工事の場や材料として利用してきた。また土を陶磁器の材料や各種の鉱物資源として利用してきた。近年ではファインセラミックス等と新素材の開発を生み、微生物遺伝子源の宝庫としても応用範囲はますます広がっている。

一方、素材としての土とは別の観点から大地を考えることもできる。それは、スペースとしての側面、すなわち「土地」の問題である。

歴史的にみると土地所有のあり方は、その時代の社会に応じて変化している。土地の利用は、農業的土地利用および都市的土地利用の進展によっていっそう広域化し、さらに現代社会にお

いては、巨大都市の地価や私有権をめぐる問題を生み出している。

このように、大地は人間生活と多様なかかわりをもっている。本講座では、最近の研究成果を取り入れて素材としての「土」とスペースとしての「土地」の両面からその歴史と現状を浮き彫りにするとともに、人間社会の将来についても考えていく。

2) ラジオ放送公開講座について

テーマ：東海の企業と経済

日本は世界の経済大国に成長し、日本国民の一人あたり所得は、世界のなかで最も高いグループに属するまでになった。しかしながら他方で、現在の豊かさを更に充実させ、それを維持し、発展させることができるかどうか問われている。企業の活動には国境がなくなりつつあり、企業は国境を越えて自由に移動するようになってきているが、その背後で労働者の雇用不安やわが国の伝統的雇用慣行の変化が起こるなど、生活面での不安が増してきている。東京への情報の集中と国際化は、東京の地価を極端に上昇させ、それが名古屋などの地方大都市にまで波及して、経済活動や生活に無視できない影響をおよぼしつつある。こうした新たに起こってくる様々な問題に対し、政府は経済活動を活用化して、国民の生活を充実させ安定化させる政策を模索し、地方自治体は経済社会の流れに即応して、時代にとり残されないように地方の発展の道を探っている。

東海地域は生産面におけるわが国の中枢地域である。東海の企業は、経済の環境変化や輸出環境の悪化にどのように対応し、将来、どのような経営を目指しているのか。行政のこれから果たすべき役割はなにか。東海の経済と暮らしはどのように変わろうとしているのか。この講座ではこうした問題を、経済と企業経営および歴史の側面から考える。

3. 番組、印刷教材、学習指導の関連づけについて

番組の台本作成は、テレビ・ラジオ講座ともテキストの原稿によって行うこととした。よって、番組は概ね、印刷教材に沿ったものとしたが、ことに、受講生以外のテキストのない視聴者にも十分に理解できるよう配慮も行った。また、特にテレビ講座では、受講生が印刷教材では表現ができないもの及び映像で表現した方がより理解されやすい事柄については、番組のみによった。放送公開講座をより深く勉強しようとする受講生のために、テレビ・ラジオ講座とも印刷教材の各放送分ごとに参考文献の紹介を行った。

学習指導では、受講生にアンケート調査を実施して、放送内容でもうすこし詳しく説明して欲しいことや質問したいことなど、放送内容及び印刷教材で十分理解できなかった部分を補足する方法で行った。

4. 番組の学習効果について（講師の印象、受講生の反応等から）

現在、テレビ・ラジオ講座ともにアンケート調査を集計・分析しており、詳細については、後日明らかにしたいが、概ね次のような意見があった。

（テレビ講座）

- (1) 身近な問題に即した講座でふだんの「土」に関する知識や考え方の幅が広がり非常に有意義であった。

- (2) 写真、図、実物または実験室等での収録などを多く用いて、理解のための印象度も高まりわかり易かったという意見が多かった。

(ラジオ講座)

- (1) 日々変動する最新の情報が豊富に含まれており、関連ある新聞記事、本等を読むようになり社会が広がった。
- (2) Q. and A.方式及び現場での録音等が盛り込まれており、理解がしやすかったという意見も多かった。

5. 印刷教材の作成過程について

(テレビ講座)

放送公開講座の内容が自然科学の多様な専門分野にわたっているので、全体の一貫性及び重複をさけるための調整に十分な時間を費やし、また、社会科学の立場から現代科学の進歩と人間生活への影響を見ることにより一層講座の充実をはかったので、それらの配慮にも相当の時間を必要とした。

(ラジオ講座)

単独部局で実施するため、担当部局である経済学部には公開講座小委員を設置して検討を行い、講座全体の一貫性及び各テーマの独立性を持たせるために十分な時間が費やされた。

その他、教材執筆にあたっては、

- (1) 文章はなるべく専門用語を少くし、平易なものとなるよう配慮すること。(2) 文体は「……である。」調とすること。(3) 参考文献等を最後の頁に記載することなどの配慮をした。

6. 学習指導の実施状況について

テレビ・ラジオ講座ともに、学習指導の第1回目は、放送公開講座を開始する1週間前に開講式を含めて実施し、放送公開講座全体の概要説明を行った。

(テレビ講座)

学習指導の第2回から第4回(最終回、閉講式を含む)までの指導は、放送講座のパート終了ごとに実施した。実施の方法は、事前のアンケートで、放送講座を受講して「詳しく説明をして欲しいこと」や「質問及び特に興味があったこと」などを聞き、それに基づいて、はじめに補足説明を含めた講義形式の学習指導を行い、ついでその場で受講生からの質問に答える方法で各回とも2時間行った。また、終了後に、各大学共通のアンケート及び本学独自のアンケートを実施した。

(ラジオ講座)

学習指導は、第1回目から第3回目まで特別講義を実施した。このほか、第1回目は前述のとおり概要説明を行い、第2回目からはテレビ講座と同様に事前のアンケートについての質問に答え、各回とも2時間行った。

7. 「大学教育の地域社会への開放」に果たす役割について

名古屋大学では、学内で行われている研究と教育の成果を広く市民に公開し、地域社会の発展と大学における学問の進歩に寄与することを目的として、昭和44年から公開講座を続けてきたが、昭和60年度からテレビ放送公開講座、昭和61年度からラジオ放送公開講座を開講することにより、より広い地域のより多くの人々に最新の研究成果を公開することが可能になり、その対象も、家庭、企業、学生（学校）等と幅が広く今後の地域への活用による活性化が期待される。

8. 「大学の授業への活用」の状況と今後の可能性について

現在のところ、大学の授業への活用については未検討である。

9. 実施上の問題点と今後の課題等について

名古屋大学における放送公開講座は、昭和60年度から開始したが、これまで特に視聴した学内者及び一般市民からの批判の声はなく、むしろ実施についての積極的な意見等をいただいていることから成功していると思われる。しかし、放送公開講座を実施するに際しては種々、問題点がありそれは次のとおりである。

- (1) テレビ放送公開講座は総合大学の利点を生かして、人文・社会・自然科学の分野からの参加が可能な総合科目的な内容のものを実施しているが、専門領域が多様化して公開講座の一貫性などのため、主任講師相互及び副主任講師の打合せに時間を多く費やされた主任講師の負担が過重になっている。
- (2) ラジオ放送公開講座は、テレビ放送公開講座とは異なった分野で、ラジオ向けの内容で実施することとし、したがって、単独の部局に実施を依頼することとした。担当部局は負担が大きいとの意見も聞かれるので、実施部局の選出について更に検討が必要である。
- (3) 放送公開講座の放送が始まってから、放送の途中でその実施をテレビまたはラジオで知った一般市民も多く、今後のPRを強化して一層の定着が望まれる。
- (4) 視聴者の意見として、放送実施曜日、開始時間、放送時間の長短等の賛否に関するものが多く、改善の可能性を研究したい。
- (5) テレビ・ラジオ講座ともに、計13回の各放送ごとのつながりを十分配慮し、内容の一貫性、継続性を重視したい。

(2) 科目担当主任講師の所見

(テレビ科目) 土－人間とのかかわり

主任講師：教養部教授 伊藤 忠士

私は、1988年10月15日まで学生部長の任にあったので、公開講座委員会委員長としてテレビ・ラジオの放送公開講座の企画・作成・実施について統括するとともに、テレビ講座第11回に副主任講師として担当、第13回のまとめのパネルディスカッションの主任講師を勤めた。

本講座のねらいは、人間生活と密接に、しかも多様なかわりをもっている「大地」について、

土壌や「素材」としての「土」、およびスペースとしての「土地」の両面から、最近の研究成果を取り入れて、その歴史と現状の諸問題を解明するとともに、人間社会の将来について考えようとするものであった。

講師の専門分野は自然科学では、土壌学・地質学・草地学・土木工学・地震工学・地盤工学・など、人文・社会科学では地理学・日本史学・農業政策・法社会学・土地法学等の多分野にわたっているが、土・土地を焦点に多方面からの解明によって、おおむね当初の目的を果たすことが出来たとおもわれる。ただ、土と人間の生命・健康といった医学的側面など、とりあげられなかった問題もある。

第1回～第3回では、自然物としての土と人間とのかかわりについてとりあげ、土は人間文化との関わりの中に存在し、人間生活との関わりの中で造られ、変容している。その意味で土は自然物ではないという点が明らかにされた。

第4回～第6回では、土の働きがとりあげられ、土は生命循環の要であり、生命の源泉であるとともに生命の集合体でもあることが強調された。

第7回、第8回では、土の利用という面から地盤としての土について、地盤沈下・海岸侵食・地震のさいの地盤の液状化現象などについて論じられ、我々は足元の土、地盤のことをよく知らなければならないことが、述べられた。

第9回では素材・資源としての土の利用についてとりあげ、ファインセラミックスなど今日我々の日常生活のあらゆる分野に入り込んでいる土についてその資源の節約の問題を含め論じられた。

第10回以降はスペースとしての土＝土地の所有と利用について取扱い、第10回では原始時代から明治維新期までの土地所有のあり方とその変遷が歴史的に論じられた。第11回では、近世＝江戸時代の農業的土地利用のあり方について、新田開発など農業的土地利用の拡大と問題点がとりあげられ、さらに近代になっての都市的土地利用の拡大、1960年代以降の高度経済成長にともなう大都市地域の広域化と地域構造の変化のなかで、土地の利用と所有の問題、土地投機・地価などの問題が論じられた。第12回では、都市開発の具体例が取り上げられ、私的大資本などによる乱開発をさげ、住民の合意形成による都市づくり、都市開発が求められていることが強調された。

最終回第13回は第12回までの主任講師5人と私の6人で、会場も第3回のスクーリングが行われた大学の講義室にスクーリング参加者約200名に聴講してもらうという形式のパネルディスカッション「土・土地と人間社会の将来」を行った。あるべき土と人間とのかかわり方、望ましい地盤環境について論じるとともに、農業的土地利用と都市的土地利用との調整、土地所有と土地利用のあり方など、土地政策等にまでおよんで専門を異にする講師の間で総合的な討論が行われた。

今回は毎回の講座について、司会をしながら進行させていくアシスタントを一般から公募したがアシスタントとなった成田直子さんは、視聴者の立場にたって講義内容を分かりやすくしたり、問題をより明らかにするという点で、大変よい役割を果たしたといえる。

TV局の制作側のスタッフも各講師と綿密な連絡・打ち合せを行い、資料の蒐集や映像の構成などに大きな努力をして頂いた。

(ラジオ科目) 東海の企業と経済

主任講師：経済学部助教授 奥野 信宏

第一次オイルショック以降、十五年の間の経済構造の変化は、それ以前にも増して激しいものであった。企業や地域は、それへの対応を迫られ、対応できない企業や地域経済は、時代の波から取り残されることを余儀なくされた。東海地域は、わが国における生産の中心地であり、受講者の経済についての関心は大変に強い。過去の公開講座で受講者からとった希望するテーマについてのアンケートでも、経済問題は常にトップかそれに近い位置にあった。

本講座では、東海の特徴は何か、経済の環境変化にどのように対応しようとしているのか、東海地域の経済と暮らしはどのように変わるのか、それらについて行政の果たすべき役割は何か等々の問題を、経済と企業経営、歴史の側面から、掘り下げて考えてみることを目的とした。

「東海の企業と経済」のテーマで、放送公開講座を実施するとき、特に考慮した点は、次のようである。

- (1) テーマが硬いので、講師は、わかり易く、具体的に話すこと。
- (2) 13回の各テーマは、それぞれ独立した講義として聞けること。
- (3) 各講義とも、東海地域の問題を中心に構成すること。
- (4) 講義内容が重複しないこと。

これらのほかに、次のような点に配慮した。

- (5) ラジオを通して話をするとき、特に注意すべき事柄について、担当のプロデューサーに、事前にレクチャーをお願いした。

ほとんどすべての講師は、ラジオ・スタジオで、マイクを相手に話すのは初めての経験であり、このレクチャーは大変に参考になった。

- (6) 講義が単調にならないよう、構成に工夫を凝らすこと。

実際の放送では、現場で録音した声を主体に構成したもの、アナウンサーやゲストとの対談形式をとったもの、学生とのゼミナール形式をとったものなど、いろいろな形が出てきた。

3回のスクーリングは、次のように実施した。

- (1) 各回とも、最初に、講師が質問の時間も含め1時間30分の講義を行う。
- (2) その後、主任講師が、郵送されてきた質問に答えるとともに、その場で、新たに出された質問に答える。

郵送されてくる質問票は、毎回、三十数通に達し、質問項目は、毎回、延べ百五十近くになった。主任講師はそれらの質問を整理し、時間の許す限り答えた。またその場で出される質問についても、専門外といって逃げることはせず、答えられる範囲で答える姿勢をとった。

質問票に付記された、講義とスクーリングについての感想は、次のようであった。

- (1) 各回とも、講義内容は、興味深かった。
- (2) 放送された講義については、話し方が幾分硬いと思われる回もあった。

- (3) スクーリングは、興味深かった。
- (4) 講義の内容が、産業の展開に偏ったきらいがある。

制作報告

(1) 制作責任者報告

(テレビ科目) 土一人間とのかかわり

制作責任者：名古屋テレビ放送報道制作本部制作部部長職 清水 俊朗

1. 番組制作の基本方針と大学その他の関係機関との協力関係について

名古屋大学放送公開講座は、名古屋大学と視聴者との接点となる番組である。この認識に基づいて大学の企画によるテキストを、いかにわかり易く映像化するかが制作局側の基本的な立場であるが、別項（所見欄）でも述べた通りテキストに忠実であればある程、量的な問題、質的な問題（レベルの問題）で視聴者との接点が保ちにくくなることが懸念される。この点を除いて、大学側との関係は非常に良好であり、今後改善すべき諸問題の解決には明るい見通しを持っている。又番組化に際して地方自治体、民間企業等との関係も、番組の主旨がよく理解され協力を得ることができた。

2. 番組の企画、構成及び制作上の工夫、特色等について

今回、初めて司会・進行役を一般から公募した。これは、進行役が従来のように単なる番組のつなぎではなく、共に学ぶ聴講生としての立場も兼ねてもらおうとの意図からである。このため出演される先生方はカメラ目線からも解放され、対談のような型式をとることができた。

尚、公募に際しては次のような型式で行った。

- ①男女年齢を問わない。
- ②この講座を共に学べる方。
- ③タレント性は一際必要としない。

この結果100名の応募者があり、34歳の主婦成田直子さんに決定した。応募者の内訳は、女性が8割、年齢層は幅広く、女子高校生から60歳代までで、中には現役の中学校校長、マスコミ関係者など多彩な顔ぶれだった。共通していることは、好奇心旺盛、何かをやりたいと云う意欲に溢れた人たちであった。

又、シリーズの最終回は、名古屋大学構内からスクーリング受講者を交えての中継録画とした。

3. 番組の視聴状況と成果（評価、反応）について

名古屋大学放送公開講座視聴率

V：ビデオリサーチ・N：ニールセン

回	OA	内 容	V	N
1	10/1	土一人のなかの土	1.5%	0.8%
2	10/8	土の歴史	0.5	0.8

3	10/15	土のなりたち	0.8	0.4
4	10/22	土と生物	0.3	0.9
5	10/29	土のはたらき	0.4	0.9
6	11/5	土と農業	1.1	1.3
7	11/12	土の保全	0.6	0.5
8	11/19	土と土木・建築	1.1	0.8
9	11/26	素材としての土の利用	1.1	0.8
10	12/3	土地の所有	1.2	0.8
11	12/10	農村および都市の広域化	1.0	0.7
12	12/17	現代大都市の土地問題	0.7	1.3
13	12/24	土・土地と人間社会の将来	0.8	0.6
平 均			0.9	0.8

4. 実施上の問題点と今後の課題等について

番組制作担当者の所見欄に記述。

5. ビデオ視聴（6～7分程度）に当たっての補足説明について

今年度より番組の形態を、講義調のものから、司会者との対談形式へと改めた。講師にとっては、よりリラックスした収録となり、予定外の挿話が披露されるなど、より話し易いものとなったと思われる。しかし出演者が、司会者との話しに夢中となってしまう、横顔ばかりとなってしまったケースもある。今後は、テーブルの形や図表の置き方に改善が必要。又カメラ位置についても、従来の方法論にとらわれすぎ、結果として、講師のいきいきとした表情をのがしたり、卓上の立体模型が平面的に映ってしまうなど、見づらい場面があったことは否定できない。しかしながら話しかけ、対話を軸とし、難解な内容を少しでも分かりやすく伝えようという試みは、司会者の熱心な努力にも助けられ、一応の成功をみたと思う。難解な専門用語や講義内容に対する司会者からの素朴な質問が、制作者の見落としがちな視聴者の目や耳であると考え、大切にしていきたいと思う。

（ラジオ科目） 東海の企業と経済

制作責任者：東海ラジオ放送制作局局長待遇局次長 伊藤英太郎

1. 番組制作の基本方針と大学その他の関係機関との協力関係について

名古屋大学放送公開講座においては、テーマ、内容、講師陣などは全て大学側の企画に於て行われておりこれを受けた放送局側の「番組制作の基本方針」としては、番組内容のレベルを落とすことなく、わかりやすくかつ興味を持って聴けるように作りたいと考えている。

88年2月13日(土)に、名大本部で行われた「名古屋大学放送公開講座シンポジウム」にオ

ブザーバーとして出席し、終了後制作担当者として以上の様な所見を述べた。

又、本年は経済学部教授会終了後、担当教授に残っていただき、公開講座録音の方法や基本的な制作方針について説明する機会を得、過去二年度の方法や、他大学、他放送局の制作状況についてもお話し、局側の制作意図を伝えた。又、大学がおこなった全3回のスクーリングにも出席し、聴講生に挨拶する機会も与えられた。

2. 番組の企画、構成及び制作上の工夫、特色等について

前記のように、今回は出演教授に対し事前に制作上の諸点について説明する機会があり、その結果全13回のうち5回について従来と異なった構成で番組が制作された。取材によるコメントを大幅に挿入したもの、後半部分に対談としたもの、学生とのゼミナール形式のものなどであった。

これらは中部経済界の第一線で働く人たちであり、それぞれのテーマに合わせ第一人者に出演していただくことが出来た。それらは、講座の内容を増幅する形で内容を充実されることが出来たと考えている。

3. 番組の視聴状況と成果（評価、反応）について

今回も番組放送開始直後、二十数名の方々よりテキスト購入方法についての問い合わせがあり、東海ラジオ放送がまとめて置った30部の中から発送した。

番組の構成についても単一教授による45分一人しゃべりはちょっと苦痛という声（当社モニター大学生）があり、それが講座が難解であるという声につながったケースがあった。いずれも内容が高度であり、30分番組の方がいいという意見もあった。

4. 実施上の問題点と今後の課題等について

番組制作の基本ではあるが、今後とも事前の打ち合わせ等、さらに回数を増やし綿密に制作したいと考えている。

番組は、ききやすく、わかりやすく聴取者により興味を持たせねばならない。

(2) 番組制作担当者の所見

（テレビ科目） 土—人間とのかかわり

制作担当者：名古屋テレビ放送報道制作本部制作部部長職 清水 俊朗

名古屋大学放送公開講座は1985年度から始まり「宇宙・航空の時代を拓く」「水—人間とのかかわり」「ミクロの科学と人間生活」そして'88年度は「土—人間とのかかわり」を大テーマとした。どのテーマも人間生活と密接なかわりを持ちながら、しかも壮大な広がりを持っているのが特長である。しかしこれを13回シリーズで全体を網羅するとまさに至難の技である。1回分のテキストの内安は少なくとも放送時間の2倍に相当するのではないかと云う先生方の感想もあった。公開講座の制作に際して、毎回頭を悩ますのはこの問題である。

テキストとテレビ講座の関連については、62年度報告書の中で毎日放送の岸本氏も指摘しておられるが、大学の研究成果であるテキストを購入し、スクーリングを受講する人と一般教養としての感覚でテレビ講座を見る人たちとは関心の度合いがかなり違うのではないかと思われる。前者が、「より詳しく、より正確に」とするなら後者は、「よくわかり易く、より興味深く」と云った程の違いである。これをサブタイトルで例えると、第4回「土と生物」は「スプーン一杯の土に小動物1万匹、微生物50億個！」と云う風に表現されるだろう。もちろんこれは極端な例だが、テレビ番組を制作する立場としてはなるべく大勢の人たちに見てもらうため、多少邪道かもしれないが視聴者の知的好奇心を掻き立てるような要素が必要なのではないかと思われる。視聴者がそれぞれの興味の対象についてさまざまなアプローチが出来るような、換言すれば学問の山への登り口が幾つもあることを示すようなガイド役を、このテレビ講座は任っているような気がする。

迷いながらの結論であるが、大学の貴重な研究成果をより多くの人々に知ってもらい、視聴者それぞれのイントロダクションとしてもらうためにはテキスト―テレビ講座の関係をもう少し明確にし、例えばテキストを一度分解して大学の監修のもとにテレビ講座用として再構成すると云う方法はいかなものだろうか。今回の打合せの中で或る先生が“日本人はものごとを科学的に考える習慣があまりないんです”と云うことを言われたが、これは或る意味で放送公開講座の基本的な役割を語っているように思う。

(ラジオ科目) 東海の企業と経済

制作担当者：東海ラジオ放送局局長待遇局次長 伊藤英太郎

(その1)

総括の(1)、(2)でも述べたように、年を追って大学側とのリレーションが円滑になり、事前の作業量がいろいろな面で増加したことは、番組の内容を充実させる結果につながった。

まず、教授会直後の制作担当者との顔合せと説明では、先生方からもいくつかの質問があり、はじめてラジオを利用した45分の番組制作に対する認識を持っていただく上で大きな成果があったものと思う。この点に関しては、主任講師を勤められた奥野助教授の配慮に感謝したい。

その結果、前記のように5回にわたって従来にない番組構成をすることになり、取材に当たっては下記の人々の御出演を得た。

東海銀行常務取締役調査部長	水谷研治氏
トヨタ自動車取締役上郷・下山工場長	好川純一氏
中部経済連合会専務理事	阿久津一氏
名古屋市市制百周年記念事業推進室長	高木勝義氏
名古屋大学工学部教授	月尾嘉男氏
世界デザイン博施設計画プロデューサー	佐藤五郎氏
御幸毛織株式会社社長	榊原敏之氏
株式会社サカキヤ社長	川並紘司氏
名古屋三越百貨店婦人用品部長	ほか

こうした現場の人々のコメントが講座の中に入ることによって、番組をより身近なものとしてとらえ、学問と現場との接点を聴取者に与え、講座をより今日的な立場に置くことが出来たと考えている。

(その2)

名古屋大学放送公開講座のラジオ科目は今年で三年を経過したが、初年度の「健康」二年目の「教育」について今年は「経済」と現在最も社会的関心の高いテーマを扱うことが出来た。とりわけ本年度は、内容的に充実しており、良い番組作りが出来たと喜んでいる。

制作に当たっても、事前に全講師に対して、テキスト執筆前にラジオ講座についてお話をする機会を得、過去のあらまし、他大学や他放送局の方法、担当者としての私の所見を知っていただいた上で制作に入ることが出来た。そのため作業量は倍加したが、具体的には取材、編集、対談、ゼミ生出演など従来にない制作方法を実現することが出来た取材に当たっては、東海地方の経済界で活躍するそれぞれの分野での第一人者の声を放送に乘せることが出来たし、先生方も良く番組の目的としている所を理解し、時間をいとわず努力していただけた。

全13回の放送のうち、こうした番組制作が出来たのは5回に過ぎなかったが、他に45分一人しゃべりの先生の中にもかなり高度な内容にもかかわらず理解しやすく、かみくだいて、しかも音声明瞭に放送していただけた先生方もあって、年を追うごとに〈放送番組としての〉質的向上が見られたのは嬉しいことであった。

しかし、中には依然として問題を残す出来上りのものもあり、これらをさらに減らすことが、これからの課題であると考えている。そのためには事前の大学側とのさらにつっ込んだ話し合いが持たれることが必須の条件であろう。

視 聴 率

(テレビ科目) 土—人間とのかかわり

V：ビデオリサーチ・N：ニールセン

回	OA	内 容	V	N
1	10/1	土一人のなかの土	1.5%	0.8%
2	10/8	土の歴史	0.5	0.8
3	10/15	土のなりたち	0.8	0.4
4	10/22	土と生物	0.3	0.9
5	10/29	土のはたらき	0.4	0.9
6	11/5	土と農業	1.1	1.3
7	11/12	土の保全	0.6	0.5
8	11/19	土と土木・建築	1.1	0.8
9	11/26	素材としての土の利用	1.1	0.8
10	12/3	土地の所有	1.2	0.8
11	12/10	農村および都市の広域化	1.0	0.7
12	12/17	現代大都市の土地問題	0.7	1.3
13	12/24	土・土地と人間社会の将来	0.8	0.6
平 均			0.9	0.8

聴取率

(ラジオ科目) 東海の企業と経済
第10回「地域開発」

(東海ラジオ放送)

		全 体	男	女	男	
					12 才	19 才
松村英子の今日を生きる 世光心のニュース・天気予報	午前5時	2.2	1.6	2.8	0.0	0.0
		2.4	1.6	3.1	0.0	0.0
		2.5	1.3	3.8	0.0	0.0
		2.9	2.0	3.8	0.0	0.0
名古屋大学放送公開講座 東海の企業と経済	6	2.0	2.6	1.4	0.0	0.0
		2.2	2.9	1.4	0.0	0.0
		2.0	2.3	1.7	2.2	0.0
朝はゆき色 ラジオいろ	7	3.0	2.9	3.1	4.3	4.2
		4.0	3.9	4.2	4.3	4.2
		3.5	3.3	3.8	4.3	4.2
		4.2	4.9	3.5	10.9	0.0
		4.2	5.2	3.1	10.9	0.0
天らんの窓をあけたら	8	5.2	5.9	4.5	4.3	0.0
		3.9	4.6	3.1	2.2	0.0
		3.7	4.2	3.1	2.2	0.0
		3.0	2.9	3.1	0.0	0.0

12月3日(土) (%)

		女				職 業 別				
25 才 以下	40 才 以上	12 才 以下	19 才 以下	25 才 以下	40 才 以上	男子 生活者 給料	女子 生活者 給料	商工 サービス その他	主 婦	学 生
1.8	2.4	0.0	0.0	1.0	5.7	1.6	3.4	4.8	1.8	0.0
1.8	2.4	0.0	0.0	1.0	6.5	1.6	3.4	5.8	1.8	0.0
1.8	1.6	0.0	0.0	1.0	8.1	1.6	4.5	4.8	2.7	0.0
1.8	3.2	0.0	0.0	1.0	8.1	1.6	4.5	6.7	2.7	0.0
0.9	5.6	0.0	0.0	0.0	3.3	2.2	0.0	5.8	1.8	0.0
0.9	6.4	0.0	0.0	0.0	3.3	2.7	0.0	5.8	1.8	0.0
0.9	4.0	0.0	4.3	1.0	2.4	3.2	1.1	1.0	1.8	1.9
1.8	3.2	4.7	4.3	3.0	2.4	3.2	1.1	2.9	2.7	4.7
3.6	4.0	7.0	4.3	3.0	4.1	3.8	2.2	4.8	3.6	5.7
3.6	2.4	4.7	4.3	3.0	4.1	3.2	2.2	3.8	3.6	4.7
4.5	4.0	2.3	4.3	3.0	4.1	4.3	2.2	2.9	4.5	6.6
4.5	4.8	0.0	8.7	2.0	4.1	4.9	1.1	2.9	5.4	5.7
3.6	9.6	0.0	4.3	4.0	6.5	5.9	7.9	5.8	4.5	1.9
2.7	8.0	0.0	0.0	2.0	5.7	4.3	4.5	5.8	3.6	0.9
4.5	5.6	0.0	0.0	2.0	5.7	4.9	2.2	4.8	4.5	0.9
3.6	4.0	0.0	0.0	1.0	6.5	4.3	2.2	1.9	5.4	0.0